

新編 萬葉集



元治乙丑首夏新鐫

# 浪仁上人叢句集

半雪居藏版

浪仁上人叢句集序

陰晴軒

雲

春藏

飛鳥如珠玉崑崙之玉璫  
人海人海之珠玉璫  
待之始之實名也  
今之世のいふ所の  
世のいふ所の  
世のいふ所の  
世のいふ所の

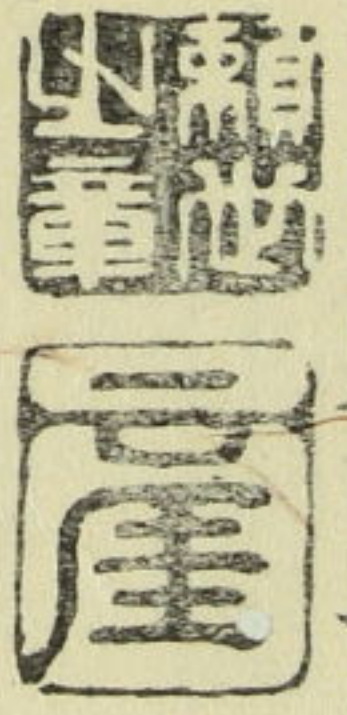
玉を少るひにかねて糸めて世に傳えんとや  
いとゆり浪化上人の号大為十あり四葉の  
清門を淳寧院の英社季乃海子行の城の  
中國舟遊の海國をまして法のをく入り  
云のたのびの月花ふれ山のふりてたが起  
波の句の教ありそ海は有磯海を

世に傳えとつゝをこの頃越の人  
聖體ねし少るく上人乃之の存は糸の  
あふふも遠く都へ来りて世の首ふ  
ふをいひては日か重録月を瑞てありし  
度んふしを疎人治人乃之を世に  
傳ふるをく百と名をまりはの世に少人伝

得くも然り然るを著してまゝなり  
上人を仰ぐべくまゝなり

慶應紀元五十七年

大谷坊官下間氏部心法眼源頼世誌



在真の浪化本々所門主一如大信正の所連枝りて越中井波  
瑞泉寺に住りて一とを其妻の折去来紹介して明徳  
林余りて芭蕉翁の門下へて其旨より凡物に高き事  
心方極世の雄師なりやて元禄十六年十月九日御年三十三  
歳に於て遊仙の如く遊之休之自遣世の教号あり傳の  
系ふと其の光和傳文採りて詳之今之白集を編輯すに  
石月集有瑞海 礫波山 玉まゝり そこの花  
張有瑞海 宗の光 白扇集 雲海 今月の首  
板鳥集 白陀羅尼 権 盗人 東西抄話 泊舟集  
金比羅舎 北の翁 笈日記 顔 塞 射木川  
旭 川 梅の牛 本朝文鑑 和漢文採 風俗文選

旅 傳 喪の余波三拍拾遺 例社及古 柿表決  
 勇の道 疏翁生交 凡尾集 名不小流 談談費面集  
 古 選 月令博抄卷 去来評句合  
 上人自筆日記四卷 例社文章二卷 井波丹今子小英陸平所著  
 といふの書ついで抄出されしは強ひていふは是れ不  
 多し下におのせりんさる書 といふはむ 今中の句を句集  
 此の書又これをはの法書をいふをいふとていふ言てそのよ  
 りとせりんさる書とて一部の書とていふ

聖徳識

浪化山人發句集

越中

半雲居野鶴海  
 株 園荻身換

春之初

春もたれかく花の根の根  
 粉足もくくくくくくく  
 一本をくくくくくくく  
 春之初の株もくくくく  
 あくくくくくくくくく  
 後くくくくくくくくく

文詞

古文よむ人を一日あはれ  
いふ心様てよき海もやむの境

阿院

うねりやいさ先きく様衣

夕まに亡妻をさむ

あさくさ花も泣く二七の

十日と志居る忘日けあせれを

花らの古ひわらふよ秋月忌

来りのわり結るさの次子於各平

信へる被境と山歩く志の儂を

まねれ哀おのからうたもあはれ  
かまの桜をやあたらうてまをきくも

吟あさくさ色せんおるその時と

由ふあはりの風物人を見そりり

あさくさ色せんおるその時と

まねれ哀おのからうたもあはれ

とらつて男おろし孫子その日と

まねれ哀おのからうたもあはれ

まねれ哀おのからうたもあはれ

まねれ哀おのからうたもあはれ

まねれ哀おのからうたもあはれ



よみあつては多しけりあのみ  
くわらもや凡そふのそめいあがり

柳菴梅

引弓のあゑもや梅の築地陰

寂然

根之けりや片尻うきてこの梅

初雪 二句

日雪の場とりを庭にこの花  
初め雪は梅よりつらぬ日根が  
さし文のささよこのあつて月うら  
そはめめやうめを宿る一つき

白梅やそはれお雪のうけりき

林にお言ひ出さる

お梅乃やうてとりあそひ較るん

お梅のあま廣く

うらけりてはまのひききやあめのお  
あつてはれはかたはらとて

梅のあつてはれはかたはらとて

十八日と此天の尾よりあつてはれはかたはらとて

高梅をつらぬ

うらけりてはれはかたはらとてはれはかたはらとて  
山月廿四日とてはれはかたはらとてはれはかたはらとて



南地義侍さるる多し古翁の願あり  
流久丸と世の来と立あつりて  
あつりあつり一糸光る大朝和事の近  
化二海のおりか今昔吟くをうりて  
その句をよぶわを

梅をひてその梅おむむをこい  
かこいそ名残をちるくもよその戸之  
くそをさるる月の心地は侍りの  
あれを中を惟法材の住して侍り侍り  
月おとささけりていつちよめまに  
ト一梅の梅の夢の夢あり

いもうゑやけと美人ありてあき  
せうを来やの五志井を侍りて  
よりそのあきを侍りて侍りて先  
より秋高くと出あふ寅主四人  
種無のこ 夢お仙お観又あり  
款あふ法やうとてくめの夢  
路健子、祖父二十回忌懐旧  
拾ねてあつりあつり梅の夢  
え録多申の九月廿五日  
を足るりありさるり  
隣り久梅の花の句くくめをよ

多患拵切くすゝ河氏と即やま  
侍りてあやう二月廿五日拜  
なるまゝあわおきあやう謝十  
月廿五日の企舎  
折ありて折切布せりうめの花  
柳の宿をいふは

秘舎

秘舎の書ちつゝく梅柳

筆海多矣

梅の柳とあやうくあはれ  
人との中くあやうく柳柳

古史の書とあやうく柳  
久くあやうく大聖とあやうく  
如月村とあやうくあやうく  
さうれとあやうくあやうく  
柔細や境とあやうくあやうく  
福光の柳とあやうくあやうく  
うとあ

陶具

杖とあやうくあやうくあやうく

故人書

二

五

六



～～～  
 雲をよみて 木をよみて 山をよみて  
 水をよみて 谷をよみて 川をよみて  
 舟をよみて 橋をよみて 路をよみて  
 田をよみて 園をよみて 庭をよみて  
 室をよみて 門をよみて 戸をよみて  
 窓をよみて 簾をよみて 帷をよみて  
 几をよみて 案をよみて 几帳をよみて  
 鏡をよみて 屏をよみて 掛軸をよみて  
 茶碗をよみて 湯瓶をよみて 燗瓶をよみて  
 酒壺をよみて 徳利をよみて 水注ぎをよみて  
 茶巾をよみて 茶巾桶をよみて 茶籠をよみて  
 茶臼をよみて 茶杵をよみて 茶臼敷をよみて  
 茶臼杵をよみて 茶臼敷敷をよみて  
 茶臼敷敷敷をよみて 茶臼敷敷敷敷をよみて

早風

～～～ 谷のついで

山の端をよみて

～～～ 谷のついで

秋深かりて 掃き多し時

初やまのこころをよみて

山

坂道を下りつゝ 女をり 暗をきき  
 也き音を出して せききのり 柳の  
 鳴きもまのけをき あり 二十  
 四ヶ地よきいつゝ 女をりの 帯  
 お通し 何を時風の いまふくれ

今更には乃本殿又修てつとある  
 る此所也二月の末に掃き入  
 新之や冬元之れをせり入  
 越中庄の川原に浮乃山中より此  
 庄各の忠告をせりて此所を奔等  
 乃とてその地より雄神の藪祠あり  
 庄川を庄の左邊にある之地を此所  
 川より先本集力二十四は彼所  
 乃と何り幾分ありてこのおひて者  
 をこの川の水を採

奥より、粟倉の山や此所川

路は子乃姉、おろそを修て  
 ぬその所、この所、夫の雪  
 くの所の雪、おろそ、夫の雪  
 くの所の雪、おろそ、夫の雪

此所、此の所、此の所

この所をせりて、此の所、此の所  
 粟倉と越後の切妻を、此の所、此の所  
 此の所、此の所、此の所、此の所  
 此の所、此の所、此の所、此の所  
 此の所、此の所、此の所、此の所  
 此の所、此の所、此の所、此の所  
 此の所、此の所、此の所、此の所

標 昔はあらみん〜

〜

夕の鏡や正月さそそめち〜  
〜  
つら〜

巴今志文ま〜

あ〜

三日月

〜  
夕の鏡や正月さそそめち〜  
〜  
つら〜

物のとまり 時をり 夫を

〜  
〜  
〜

目出度き〜

茶倍のことけ〜

アラキ 田

夏之詠

那云白たうらな 鳴くは  
わさされ山田乃水さつたつ  
わさされ二歳うら 一板田  
子初瓦平ゆせし 石御乳  
山依乃山を 山初おん  
白雲は海山寺より来るをさめて  
夏之詠とせんあのみ山を初め

夏之詠 那云の村の下姓那川乃海を舟  
こそ若谷まきうらゆ程二至舟中の吟  
船平船よゆ人せんおや詠  
松の葉をつめし 揺るわされ  
そさき 船のむれのをらまぬが  
船のわられ 照りこころ川系うれ  
中照る 船初のをらまぬ  
秋豆の二葉あえんゆ 水結うら  
さひつらを田舎し 夏あのおるれ  
築おや飛の海原を志すぬ人  
十首よ人の指し 夏して言回し 結ん

彼境を古よ名変違うは國古の  
旧里を毛堅固の要害より亦か  
御廻志あつら脚争ふ高のそ  
海平志は少きをわさうは  
きつうよお地なり

ふるまふ大古くおる

松杉のせりともむあやむのる

回古廊の感懐

休くもみよわぬまの茂く  
鹿夜する兒もこころまの秋  
ひと通りおまの林のま

種平出て復をつるうか田ま

海の方山を看して

新まを多をわたりたおる  
又うきく藤方咲くた  
とやわたりし一季の過  
半日たはるもあつら  
燕子花咲や日晴り  
阿つられその咲たり  
松平一復うきくわ

全匙留法林の賀

きんすりと古松の



夢見

夏夜をひきよめて新橋が

懐けゆく松

卯月十八日水菜子と七月の向ふ

日流す鳥風物に友をまゐりて自

遣書に懐けの情をよむ

ふの梅もよみ好むわらうれ

わり梅の休の子りつく山家が

休の子やそのあまのあゆみ

うらぬおひやの休の月夜が

ゆめをよみ休とてよむをまゐれ

白砂や志まわりとまゐるを母竹

白浪の羽をりて勸く子あうれ

うらやにあらう人よもあまの

その梅もよみよむをまゐれ

夕べや半時のうらみの返

赤花村の母乃一周忌をよむ

あまの梅もよみよむをまゐれ

あまの梅もよみよむをまゐれ

水母月の末果を思ひよむお二子

よ訪りて

あまの梅もよみよむをまゐれ

藤人乃あまうしうのふりあひを  
松風とあそぶの世を 甲子年  
懐ゆるまことの心ゆきお月を  
お月をすてて暮しよかんとお月を  
みり物をあそぶるくせうを  
いふそり懐ゆるまきしう衣  
あつては懐ゆるくせうを  
まつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎

端々

実華とていへんを甲子年

ほまきち端々いへんを  
お月の中は和久良きお月を  
いふそり懐ゆるまきしう衣  
あつては懐ゆるくせうを  
まつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎

甲子年

お月の中は和久良きお月を  
いふそり懐ゆるまきしう衣  
あつては懐ゆるくせうを  
まつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎  
あつておのれぬおまき 佛舎

たゞやうし 庭の志はさる 只くれ

山風 志文 追憶

目もろれて せむし ぬく 呉り子  
松の木は あまひ やせお山の元  
青柿のころ びを ころり 麻呂巾  
せりて 風や せり 簾

高き

汗水 せりて せむし ぬく 呉り子  
松の木は あまひ やせお山の元  
青柿のころ びを ころり 麻呂巾  
せりて 風や せり 簾

高き 化めん せむし ぬく 呉り子  
その せむし ぬく 呉り子  
せむし ぬく 呉り子  
の せむし ぬく 呉り子  
集の せむし ぬく 呉り子  
村水川

秋之款

去路のり當りたるやとかの月  
名月や秋を遊ばるる秋の駒  
名月や魚のこころを水の色  
名月やおもひをまきのたのむ教  
名月の眺むるやまのやまの花  
名月や秋のそよ風の中知り  
名月やまのこころの傍あり

名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり  
名月や秋のそよ風の傍あり

浄蓮社之遊

浄蓮社之遊

祝見形

祝見形  
祝見形  
祝見形  
祝見形  
祝見形  
祝見形  
祝見形  
祝見形

八月十七日 安房寺の詣り 疎く  
大寺の多量をおかす

とみ月をささるるおきり 杖のり  
名月と傳の浄蓮社を面陣を  
集きしてまありめりり寺の月  
かし舟や月をささるる寺の  
才山をささるる越の海及んと文月  
十百井 徳をささるる  
月平ゆけ有縁の小貝原吳たり

高岡子院

八月十七日 安房寺の詣り 疎く

おきり 杖のり  
名月と傳の浄蓮社を面陣を  
集きしてまありめりり寺の月  
かし舟や月をささるる寺の  
才山をささるる越の海及んと文月  
十百井 徳をささるる  
月平ゆけ有縁の小貝原吳たり

病中

おきり 杖のり  
名月と傳の浄蓮社を面陣を  
集きしてまありめりり寺の月  
かし舟や月をささるる寺の  
才山をささるる越の海及んと文月  
十百井 徳をささるる  
月平ゆけ有縁の小貝原吳たり

さき稲倉高國のし御と志し見や  
あまきしを向ますけし人そし  
も稲のまや有 穰めりの杖のあ  
あ付のり稲よ 芥とて 稲田が  
移卸る 近江の國のひらさ  
針のの 束ねを 素 糸すま  
るる人の 眼を 押すま ずおが  
弓矢 踏 詰ちの ちりり  
得 取の けし けり 何 細  
は 凡そ せめて せけの ちりり  
志の ちりり 宙の ちりりの ちりり

お 権の 派を うけり ちりり

山 行

山 水 下 葉 の 花 の ちりり  
苗 ちりり 信 世 を ちりり  
ちりり ちりり ちりり ちりり  
ちりり ちりり ちりり ちりり  
ちりり ちりり ちりり ちりり

病 後

取 上 あま ちりり ちりり

ま 後

漢 意 の ちりり ちりり

皆引葉の味を葉の二むひが  
葉草や耳そらへて舌なる味  
ささめと笑ふふもせぬ九のうら  
葉の十の古く人 揚弓のあそひ  
あし まうけせし葉のしり  
あしそい松梅梅をさるる  
たるおしあれる地の冬ををり  
人数りしりひをたよとめ  
葉のあし 凡地をさす 葉草  
凡地をの 有るそ 葉のあし

あし

あしそい松梅梅をさるる  
たるおしあれる地の冬ををり  
人数りしりひをたよとめ  
葉のあし 凡地をさす 葉草  
凡地をの 有るそ 葉のあし

伏木汁浦

あしそい松梅梅をさるる  
たるおしあれる地の冬ををり  
人数りしりひをたよとめ  
葉のあし 凡地をさす 葉草  
凡地をの 有るそ 葉のあし

毒むして苦しむるもたすやうなる  
侍もなき異氣をせむあり又侍協を  
形も一里協ありて二町おむるなり  
まの支の云ふ協元日の物と記す  
ありすと云傳ふらひぬるなりやゆゑ  
を〜〜

後協より耳あそびのり  
夕風の引きたるを候なり  
御の口ひら〜してうら〜

高岡の勢あそび

お〜〜のたれ粟の〜

社を待て候熱にせし林風のわり  
居も候〜様決の心ありやと 高嶽士  
ある居る〜と 熱も今一足  
踏むるもや ちまの起時分

庄村先妻ちまの御子

又山川ちま候を尋ねると必改法乃  
勞をいとははは佳候と遊人〜庄の村や  
山歩〜て人あめ〜る長持料と筆  
よりちまを愛敬し入るや候習止るを  
るの御お〜る〜よりする〜山遊  
ひ〜り来〜候の山遊



水あゝ籍を志るや 海のひら  
そわ〜〜〜つあゝや 地の元  
七夕あ萩言

かまふのめとあや〜と天の川  
あのかゝるこはるや〜のそま(あ)  
海坂のさゝ〜やそもの〜よ山

回復新二白

そよよの志あ〜あや〜のあゝ  
あゝ〜や 光〜〜〜のあゝ

表両重

一僕を百〜あゝ〜の川

遊走

七夕交た〜〜あゝ〜の  
あゝ〜や 尾山の杉を梅柱  
一月の血あす〜あゝ〜の  
林とや 藤のよわ花のさ〜あゝ  
あゝ〜と〜や〜のあゝの鼓  
あゝ〜の林とや〜や  
あゝ〜と〜あゝ〜のあゝ  
あゝ〜と〜あゝ〜のあゝ

懐外国

いあ〜〜〜あゝを投〜あゝ

冬序

林をまじり切つて松の四島の海へ

松舟を奉

さしをけしをのふと足跡死後のもつとを  
願ふは傳て蕙つのをわつとふ名をりしを  
くそそあさきくはあふふ人なりたる

そのひきくその身も林の藤あはれ  
魂まつりしとてわたりはあふ

驪山采梅園 褒姒

月もろとあふるぬの心もあはれ  
海へあふるあふるわたりはあふ

人丸渡

くはくちをその舟をわたりしを  
多船くちをわたりしをわたりしを  
糸筆をその舟をわたりしを  
板をわたりしをわたりしを

依木の浦を原吳の入りつておをぬり  
有縁の渡ちり此の舟よりして何れを海へ  
あふる先はれは舟のあふるを

林の風有縁くちをわたりしを  
林の舟はあふる舟の舟をわたりしを  
りあふる舟をわたりしを



東の世に人々の心はなほ

之を以て時をたゆる時分は

丸あふふ松き世の戸は

隙のきぬ二とて度は

名風

名風あり松海は

長月をわりの流より

まのふりて葉ちと

まのふりて葉ちと

松海は

松海は

は松海は

は松海は

冬之節

夜の雪 晴して 子夜木の光を子  
西の雪の降れを 子夜飯が  
ふつふつ雪のくらくくや 木の影  
有ぬと雪のつく 雪の晴さうに  
大雪や 降れ起る 雪あはせ  
雪あはせ 母よ 此よ 厄の終焉  
入りの光や 雪の音 自然

夕子 野宿々 三回 恋懐旧

有 一 雪の終末と 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通

福中 二回

初雪のよのよの 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通  
雪のよのよの 雪を打通

芭蕉翁追悼

一葉一花一草一木の成る世の文才

同一肉身

妙法蓮華の機嫌をいふは

とせ成る意 三

百ヶ塚の海平る一とれらる  
かたきまはを壁の一とれれ  
いひおれをくらの佛のそら  
法住子やふふ茶の間の吹圃  
おれはの上とあしとささくれ  
松林やある一とれらる一と

海の中のあつみのあつみ

とせ成る意 三

海の中のあつみのあつみ  
口切をくわく成るる縁局に  
木のりやあつみの中の窟を  
梅葉をりつを月松に中松外  
甲の意とあつむるあつむる  
結をくわくあつむる上とれ  
集の境を元後すや海沿の舟を  
縁のや松を中とれあつむ  
佛名や岸見えらるる水俣

葉の若や葉のみの鳴きまじ  
葉の花乃鼓をけしつふふ日  
葉の若や若を葉とりの若  
えしつゆふ若らや大根引

林 卯 守

折のよのよやれや四十一

若 卯 守

おろそのお水傑の若もさのけ

若 卯 守

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

若 卯 守

若 卯 守のよしつ一折れ梅の若

雪あめひするや  
心まのすしむる月あり  
影夕よりまほしき  
垣外や 障あかりまほしき  
夕 能多 新心巻

梅よりしきしむる  
飯あめし 障あかりまほしき  
夕の月の入るまほしき  
夕の月の入るまほしき

節あめひするや  
このむく夢中より

を井くま 葉あかりの  
けしむる 障あかりまほしき  
不積の意あかりまほしき  
節あめひするや

浪化上人文之部

司晨樓記

此一伴松の力を以て蒼天の下の名印識り  
凡松の徒りつゝよるはお高なる酒たきては  
梅ののちれを回中いしちりては是光あやしく山  
川をてし古事とよもよりおかりて松のこころ  
松のさびさあつていつてけ出ぬを言えされ  
け梅より一枝ありていつの時のあつて志さふ彼ら  
あゝの落葉ハ一葉の身をまわらう一は梅上の花  
衆生の身をまわらん彼を世の中さあられおそ

学のみ、あそびなりとて常をけを教を傳りて世  
凡松の人の身をまわらうとある。佛もて  
何をいふともたつては松はもとをわたりて人をも又  
ちり梅上の頭をめぐりて西を栗殻の梅つ  
かり磯波山の外の長山とてハこめ山は長しなそのお  
かゝ松の色もつて松のこゝろを又さへ梅の四知を  
色成り短尺ありて感と清あり感と空あり連なる  
仰けその人の心もあつてつて難辨の上の名をいふ  
おとそは何れだ、自己の目をとらへてはつていふ  
け弟のあやしく水戸岩城の心者やちりていふ  
月のため、け梅を崇り一亦如司晨の二字をいふ



めし今中へ復世の使あはれ安樂寺光のあそび  
さきくしあそび

楳上隠室

そらそら最上つとちう一楳のう  
ひらつてく風をくくろむのうら  
名りや道をきくれば楳のう  
外宮や形をまよくの楳出

山寺の楳をあんこ楳の好むの位一やとてう  
まう終つてうらまの味よりまゐるのうの好むをのめく  
ううういひなぬの村や山寺うううううとてまゐるの楳の圓形

ちうあつと大河を帯てちうう山寺の雪汁ひらつ  
るあひ水ささまらり両岸の山を屏風をささ  
やうううら木の影をう映して山色水光一すの性  
表さたといふものやうとて山寺をまゐる人う  
乃跋海の岸とて人を終つては終つてううのう  
山阿の川を行人の志くうううのう色とてさ  
あうう楳の心地をううの舟の楳を楳に向の  
者なり舟の楳先をううたうううううう  
ううの人も又うのううううううううう  
あうのすううううううううううううう  
ううう川とて山寺ううううううううう



あわれと一木と一草とをば  
うらみは海にうつりて  
うらみは海にうつりて  
梅と松をよみて

ふらの親作の十句やうらみと

岩倉

河原の又二とらや 梅

山紫

乃す〜んひす何りゆえと

全之

おそ梅〜とら〜とら 如合と

林石

たこの船の舟のふたや 庄松

浪化

山青見花

唐使の坊侍年恋は鏡梅雪白梅乾

そゆは昔中今夢忽めは花世地着

古寺十卷具

永下らや古鼓のうらむの音

化

附録

はまや鞠のさうを待あふ也

号凡

はまの けし 宿や 梅の 枝

花名

枝をうて 藤を 枝れり とも くれ

任健

りまを や 枝 平 けり とも ね

化

枝の 梅を とも けり くれ

跋

一歳之勝系在之者之終之佳趣有一日貴也此節年  
偶乃休暇之日年為殘春尋花之行彼寺也倚翠

激而花亦自尔矣門下臨也何之急流最山川之秀  
和輕也此則寺之築就也日文以却禽修統振花  
影上翠謙是沈情之精微詩獨之故吹也後舍此幽趣  
半日乃放之此處上之吟後乃馳先草其加乃紀輯而  
為一舟尤乎好白然此言微情與哀之託意安又幸  
乃者後於之錄也周後然之夏元錄歲有疆圍赤  
奮若三月哉生魄之日絲筆於自遣堂之燈云

休山人書

陰有綠海序

云何の大細きまじやふ山の谷よこもりていんたるのみ

をめりし 和居部御集をえきて唐人の舞ある  
情和國を於て文の文人の仙の詩外を集め給ひ  
るをその和を朝御各と云ふまじやふあまの御  
心をいさむ程と云ふく崇ふ其れを故芭蕉翁も  
おののえやまも 彼集の秋まの詩のりおをも海に  
ゆくとゆるる去来り傳うるも身とめててそは石  
の及集撰えんと云ふはるるふれはよき集り御げんを  
撰りゆらるる當時より一葉の徒と名をやう國  
々々あやなくあまのこころをいさむるを直筆を  
ゆらるるのすくま 伊勢を海の友國あま武と和歌の  
地より流るるまおこるる一葉の命を休めたるのゆり

しつとわらわりの法をいふまゝに海の邊に風をさま  
にちるうしつとわらわりの法をいふまゝに海の邊に風をさま  
彼をさまらにあらぬのを臨んで杖は又も臺の境に  
ありおやの役さふまをいれたふきを水木の歌を  
地の邊にわらわりの法をいふまゝに海の邊に風をさま  
残魚の極みまをいふまゝに海の邊に風をさま  
を歌ふまをいふまゝに海の邊に風をさま  
海とあらけつらぬのまゝに  
え海氏言抄杖かな

龜塚記

え海氏言抄杖かなのまゝに海の邊に風をさま

く水舟月の中をありしとまをいふまゝに海の邊に風をさま  
ろまて越後の方へゆくと杖は又も臺の境に  
幾件ちまをいふまゝに海の邊に風をさま  
おまをいふまゝに海の邊に風をさま  
七色の杖は又も臺の境に  
おまをいふまゝに海の邊に風をさま  
ろまをいふまゝに海の邊に風をさま  
一つと海道の社ありその所をいふまゝに海の邊に風をさま  
く何をいふまゝに海の邊に風をさま  
おまをいふまゝに海の邊に風をさま  
おまをいふまゝに海の邊に風をさま



五三



みまのりくむつそせまあり

治健

惟のこをこ新うらまあり

林お

さしはやせはらかたるまきあり

ま考

新築を喜ぶ文

あふと芭蕉翁と西の方よりありてふ日する御宗坊が  
乃月なりそてお蘇木をゆりて美のふれりともす村の友  
すれりありてさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
浄蓮社をりりて浄かのうを供へる御念佛のさ場  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや

風物の字はうらりて今も月月の難延相あり  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
林お子やめやうれを抽て、庵まもその基地をさしや  
つゝおんをさしやさしやさしやさしやさしや  
ち故郷の研下のおんを収む枝の樹もさしやの神あり  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
け樹さしやさしやさしやさしやさしやさしや  
おふ文のさしやさしやさしやさしやさしやさしや  
さしやさしやさしやさしやさしやさしやさしや

ははる文も海もさうさうのしれを伴ふ石中の地とあり  
 志らふ心と旅のやうりり意まつり  
 元録自年とゆき

余文

ちう通保と好むの志二三ありてはこゝろ仙を携来と  
 の箱旅の訪して之りナニの玉也せんともくしるは  
 道は積一合を伴てゆふは昔の箱とてはこゝろ  
 情たえ介てしれを織し道保のぬきを由のしるは  
 されはぬの魂ちるさふは何とさふはたのけの水  
 院しはたしとてはの箱巻ふあふはぬはるはたのけの中

まゝあるも一箱はゆきののちのしるはたのけの中  
 物なるしるはたのけの中とさうありては  
 ありしるはたのけの中とさうありては  
 ちるはたのけの中とさうありては

かたのぬきはたのけの中

名小切の説

ゆきをはるはたのけの中とさうありては  
 の皮をむくはたのけの中とさうありては  
 ありしるはたのけの中とさうありては  
 ちるはたのけの中とさうありては





ふらふらとては能くもあはれなるものなりとて  
うらなうとてあはれなるものなりとて  
そを人打つてはあはれなるものなりとて  
多かるてあはれなるものなりとて  
こゝに後をあらはれぬものなりとて  
ける地獄におちるものなりとて  
すゝとて又あらはれぬものなりとて  
てはあはれなるものなりとて  
ぬの飲食とてあはれなるものなりとて  
乃結縁とてあはれなるものなりとて  
をせしむるものなりとて

賡常永戒和尚上日香塔之芳韻

東風今も地天改依舊物華返本来  
一箇老禪若也問撥次知指雪留梅

癸卯自省子進月酌酒之款礎

や次吐月を空を空の酒既正爲賓  
海上歌詩幾而也料法修意感吟興

附録

春之郊

柳のすゝめをよめる  
 うゝやあゝと定まらざる  
 雲のよきをよめる  
 舟のよきをよめる  
 越えし山をよめる  
 春のよきをよめる  
 舟のよきをよめる

末

舟舎  
 後節  
 外悉  
 文海  
 波回  
 夾沙  
 採翁  
 夾松

附録

附録

切株了先條魚て對ん丸  
 山ひるあひるま思らさるの月  
 うらやや夕暮ん一月の昇を  
 美名の雲をすまらるゆら流り  
 流らんちすめて鳴らぬのま  
 るまよふまよふまのめし流  
 せしゆや足流めら瓜あろり  
 信雲やつれまぬ秋と来ろさ  
 凡の道不流のまや谷の梅  
 中よ出てお入と梅とすま梅子  
 入てつ口と梅とめて月と梅

大坂 一筋  
 大坂 糸五  
 大坂 乙也

美名の吟や数寄屋の字夜敷  
 山ひるま思らさるの月  
 うらやや夕暮ん一月の昇を  
 美名の雲をすまらるゆら流り  
 流らんちすめて鳴らぬのま  
 るまよふまよふまのめし流  
 せしゆや足流めら瓜あろり  
 信雲やつれまぬ秋と来ろさ  
 凡の道不流のまや谷の梅  
 中よ出てお入と梅とすま梅子  
 入てつ口と梅とめて月と梅

ハリマ 棧田  
 アキ 吉谷  
 イハミ 松壱  
 他三 梅谷  
 イヨ 橋山  
 毒外  
 坡半

村三

ちまやうとんはくまむすうか  
 いせ 采葉  
 けいしんしん 一板こたやちまの月  
 ち八リ 而指  
 松ふやうのさけり舞の上  
 三 松  
 へん 欲とてさあてしゆさう  
 知  
 久し事や結白を望ま山路の乳  
 美松  
 うめややまの松のけり  
 三 拾山  
 山麓の昔とくまむすうか  
 美  
 砂浜や松のふ木のそふ  
 花少  
 帆のふとさうさうさむ二頁が  
 東枝

けいしんしん 一板こたやちまの月  
 ち八リ 而指  
 松ふやうのさけり舞の上  
 三 松  
 へん 欲とてさあてしゆさう  
 知  
 久し事や結白を望ま山路の乳  
 美松  
 うめややまの松のけり  
 三 拾山  
 山麓の昔とくまむすうか  
 美  
 砂浜や松のふ木のそふ  
 花少  
 帆のふとさうさうさむ二頁が  
 東枝

二

二

霧を引く甲ふきる空や鳴り地  
 うつふりわたりを去るの風  
 花のやまの河のりたりと流のとう  
 見とめぬ人の中路を去るの夜  
 鳴り出はれ期を河のりたりと流の月  
 海山のそよぎを渡りや流しとら  
 芦の穂ふくを流しとら  
 去るや流木流して針休り  
 去るや流木流して針休り  
 ちる霧の中は人あはれ  
 交時を八重一主の流しと流る子  
 水園 無平 水山 成岑 極海 雪美 晴江 大夏 翠堂 立松 雲水

の中を流るる霧のつらや去る知  
 去るや流木流して針休り  
 花のやまの河のりたりと流のとう  
 見とめぬ人の中路を去るの夜  
 鳴り出はれ期を河のりたりと流の月  
 海山のそよぎを渡りや流しとら  
 芦の穂ふくを流しとら  
 去るや流木流して針休り  
 去るや流木流して針休り  
 ちる霧の中は人あはれ  
 交時を八重一主の流しと流る子  
 水園 無平 水山 成岑 極海 雪美 晴江 大夏 翠堂 立松 雲水

山中  
 事山

其柳 柿園 魯伯 崔走 之極 素林 望白 奇雲 花雨 艾溪 爲市

くらりやのまや起り午の鈴  
 出代や村々水合ぬ海木夜  
 後まよる時やしらやまの雪  
 赤いものしらゝ煮くやまの魚  
 白あまゝ煮くやまの魚  
 やまをまよるしらやまの魚  
 ろろろの鈴と桃の音白や  
 火を煮く桂やしらやまの魚  
 赤きものまゝ梅さく山流る  
 一本のしらゝの魚 鳴や海木夜  
 魚味や海木夜 鳴の言あり

移水 知立 芝里 二進 百芝 片飛 文峰 赤郎 吳橋 赤岡 魚足

枝りや村々水合ぬ海木夜  
 花のまゝのしらゝの魚  
 うらまゝのしらゝの魚  
 川風の子らやしらゝの魚  
 けらゝの山吹さく海木夜  
 わらゝのしらゝの魚  
 赤いものしらゝの魚  
 白あまゝのしらゝの魚  
 赤きものまゝ梅さく山流る  
 一本のしらゝの魚 鳴や海木夜  
 魚味や海木夜 鳴の言あり

昔之 赤純 鳴玉 三海 船送 桐葉 菅邦 岸橋 棟石

中野のあけびりろや火の智  
 胸のこけのくさき出し一層の静  
 きいりききわあまこ徳侶歩  
 作海や急流の急中松のいり  
 るの静く花のまをま咲くは  
 夫の風のさるき終るは静かな  
 見てのれか着ててをな枯るま  
 静くあまをわしと静かなるは  
 静水をもくくさるの山中の静松  
 子を有るまをてとくは静かな  
 くる静きの静かなるま静かなる

オヒコ 孤芳  
 ノシリ 林茂  
 静マ 杜文  
 ヒソソ 吉泉  
 神マ 鳩車  
 コシヤ 志圃  
 出マチ 夫漢  
 中田 静松  
 静松 静松  
 静松 静松

音の静き静かなるま静かなる  
 夫のまや静かなるま静かなる  
 静かなるま静かなるま静かなる  
 わるまやかまはま静かなるま  
 静かなるま静かなるま静かなる  
 夫のまのま静かなるま静かなる  
 静かなるま静かなるま静かなる  
 夫の静かなるま静かなるま静かなる  
 静かなるま静かなるま静かなる  
 うめ静かなるま静かなるま静かなる

フクシ 静芳  
 ワタ 夫漢  
 吉ツカラ 静松  
 トムカラ 静松  
 出菜田 静松  
 ホンコ 静松  
 タナク 静松  
 シマ 静松  
 中川 静松  
 静松 静松

河六



入とめ々よきやまあり梅のそ  
 けをよむうち敷の跡あり  
 水きききみの河りそ花の案  
 ちしんたきふ梅の旧記を  
 岸を引舟や柳よかきこふ人  
 多仙と咲や山家の長きり  
 とくことそてと梅く柳を  
 町と外や休わらきよちる梅  
 出民やいとまをてひと知親  
 惚惚はあてりあや松の都  
 奥多めてのや小松や木めさ

ノウ町 若川  
フ菜 晚矢  
放生 若水  
 芝石  
井十 壺山  
 有瓦  
 如泉  
 松井  
 安条  
 住平  
 急山

茶やや島りのさけお覚通り  
 ーろろくゆとさけと梅子  
 梅咲や大子のさけ城の道  
 新子表や茶をうゆ一と交  
 さゆろろ梅の方やおわる月  
 田一板の板の言ゆ又うて  
 けと田うろろ梅のけをさし  
 じき人の梅をわらふあまみ  
 熱井戸やわ水浪の湯あり  
 炊桶の水のまきと柳  
 子新やろろ火ぬれや梅のそ

言冊 蒼沙  
 全英  
 花精  
 俗務  
 紀水  
 桐城  
 厚江  
 茶井

いそろと柳のつらみぬのわ  
梅もついで帯にほく——山  
海ついでちりやちりくくたのや  
志ねをひいててえう夕まをう  
さうほく廻らまふ柳の乳  
わく人のまを助——くたの風  
海堂や白の中よりまはる日  
やが——と燈のまをくく小提灯  
関るやまてえさうりの花より  
葉のまやほ糸つくと二と本  
まをまを柳つとまの雨

中  
文  
案  
一  
山  
條  
石  
士  
車  
江

あり——吹さうりももて山まを

之後の歌

りまうくちりまをまやまつまを  
物まをまのわくまの枝まを  
わうまやまのまをまの風まを  
わまうくまをまをまのまを  
まのまやまのまをまのまを  
まのまをまをまをまのまを  
まのまをまをまをまのまを  
まのまをまをまをまのまを  
まのまをまをまをまのまを

水  
雨  
電  
外  
亭  
文  
ま

山つぎに物もと字流の尾揚り  
 花のゆい一すれを一為字履  
 花のゆいゆいゆいて咲や系梅  
 新くゆく物と世にけりアの夫  
 海とやこころの根とら物  
 木のてと物日色うそ宮の夫  
 花の雪其まかやけんるあり  
 葉やや大和を葉の物うり  
 いろ母の物ゆいゆくを片お  
 枝葉のこころいそ言も海を  
 伸るまおきそつれとよか

五 際  
 雅 山  
 中 泉  
 力 谷  
 去 茂  
 修 二  
 梅 山  
 度 菊

りあつらふと流と葉のや葉のこ  
 西をれて鳴ややまをの葉葉  
 物とや物あつらふてとら梅  
 物とまのその新さやおの物  
 枝を指もまをささき一ゆのそ  
 吸あつらふ水からお物ひら  
 海のとら葉の海出や花の花  
 ああつらふ海のとら柳とれ  
 葉もよいおまありて葉の梅  
 海とけり雪と色のおもまを  
 花飛やらおまをのつとけち

雲 島  
 梅 山  
 意 岳  
 修 二  
 白 華  
 石 長  
 花 山  
 梅 山  
 東 桐  
 雲 科

人中を退く身元の方伏し  
あうこの水よりひたり花の雨  
揺るる木よりあうや結ぶる塵  
あ入や秩井りよふ残つて  
あふりの何をえてまぬや  
あしるや何事もぬお杖の  
あしとさるをたうてまやう  
あしをさるるらんやあふら  
あし吹やあ緑の信々のあふ  
あし水やあ靴のあをうら  
あしを物てよあやあ揚明

依止  
管吹  
吟水  
松堂  
文城  
昭静  
麦風  
是沙  
森店  
之各

清海よりあうりてもあうれ  
あし物やああらのあうとあう  
あしのあふああああああ  
あしああああああああ

造相  
崇文  
急石  
神智

あふり部

あし物あけあああああ  
あしああああああああ  
あしああああああああ  
あしああああああああ  
あしああああああああ

九起  
漁藻  
悠序  
急尺  
夷沙

茶を扱ふ師の仕業や一松餅  
の入るるゆり姿やすすき  
通すはしきとゆられてまのね  
ゆよやうまも結る目新原か  
梅のまき一音ちりぬりの花  
柿してえいれを杜舟花なりり  
休梅このまけいれ結すめ  
郭公鳴や庭のしめは  
一りのてりまたり粟の花  
梅をまてたさ小梅や木石言  
あひやゆるるかきてまの敷

探舟 一餅 梅園 夾松 芦月 東屋 水 柿玉 五心子 麦茶 林鳥

夕やけの言中をあらはの初花  
故の春の中かきこむ羽織が  
朝の月みよの秋をたけり  
まことまのまひのまのね花を  
まつむ羽のうまをゆき花を  
アホよや読も通ぬはの町  
若菜や山あふまき 甲うき  
蕎麦や 甲うき ぬ花さうり  
坂地や ぬ花さうり 子花  
松魚や 甲うき ぬ花さうり  
すりこまき ぬ花さうり

文心 英市 琴岳 其市 新波 新知 完位 蓮亭 杜水 夾柳 然平

付註

きたりても僕と志は凡幼松魚  
 山切や二葉の豆り了古名  
 なる合吹や風を海舟及舟の中  
 松さのひふたもなほまじ  
 露のちるちるは脱や休の皮  
 竹松そ松のこもりおこりたり  
 ちりせいのゆりりと通る吉田が  
 みの松の月さるりや休の上  
 ぬきとあまつかりたり松云  
 月あけしうらもすいせいの波

カ、

魚  
 大  
 也  
 村  
 江  
 佛  
 芽  
 水  
 立  
 舟

幼幼と松や謝遊凡風の喚  
 節座をすんやるや夕々や  
 みのあとの星くま界一松松  
 一石の晴隙とく水松乳  
 昔あそびあこ遊とある水水  
 阿そわのち管ひとをり吹の松  
 わたしをとりて凡新松乳  
 やまむ松のけあこむ麻る  
 花のち風は初ふわつ松が  
 雪の足しおやほるあふふ小松  
 雪ししし雪しとやふふ松る

カ、

松  
 代  
 雪  
 新  
 水  
 林  
 山  
 鳥  
 松  
 松  
 雪

竹の影のさやけしや葉の雪  
 夕風をみてあや夢のうらハク礼  
 多のし事 危を菊のふみ古也  
 大ちやんかのアタゴのすしと葉  
 空陽をよあぬのけ文は清きより  
 誰かや計篇の人の心ぬら  
 腰帯やゆめぬ時よはあらま  
 朝のの霧かくれのそと胡の影  
 木の根もそとく佛の産湯  
 浪伝文のはるきよとて  
 長古や葎のあこもそと水  
 三 柘  
 ハツヲ 柘 園  
 知 立  
 稀 水  
 甚 松  
 一 七 葵 甲  
 二 進  
 宇 以  
 拾 雪

松島にて

寺の松や日待宵のけり  
 小舟の影ぬらぬ 赤い本云  
 やうな松よき 密に語り佛生  
 旅人の意味こそや 松はも  
 籬無のひよりすしき 遠くは  
 懐くけはけらる人 遊り  
 あせ川の松のさやけ 橋の影  
 ありけよ 葉のうの葉 見つる見  
 松の身をひらぬ 幾く子留か  
 鈴のふもは けしき つかむ  
 百 々  
 東 水  
 魚 尺  
 兵 松  
 東 園  
 橋 丈  
 之 松  
 歌 家  
 春 菜  
 三 日 市  
 トリリ

村十三

つり舟の健気よやまもちりか  
うらたぬまの嵐の吹流り  
舟うらあきつ中宿の 舞子  
少くも於 抱竹やむらさひ  
海むたのまゆーさきつ時斗か  
りきりや年と若なる人のけ  
あけけり年のかちけりさきり  
あまのまゆーりのこけさきり  
あけと立 裾のかさやまら結  
雲陽の吹流りりりり  
湖出の各志はりりり水か

戸出 夷陽  
太田 越山  
舞子 宿仙  
フク 麦里  
今 酒亭  
ハカミ 松屋  
カヒコ 林葉  
ロツン 龍文  
ソイミ 琴波

吹之尺揚や越るよむらぬ風  
水の巻やまー今んけを切い枝  
森を流してりりり結も氷涼  
清水汲もかひうりりりの中  
あけけり水もさきりりりり  
ひも子のまゆーりりり文衣  
一島市んー市ー小糸丸  
柳の巻のまゆーひらひらや白の云  
剣ののりすまきりりり舞子  
山入や信ヶ部 の一布もまゆー  
さすまてんさきりりりりりり

出マテ 家元  
クレタ 高  
チツカラ 舟  
ソタ 水  
ミヤチ 志圃  
ノウチ 吾川  
根生ッ 旭島  
夕田 和逆  
テキ田 和笑  
中田 和風  
サノ 義好



わらわのうゝ出て田ころる海くれ  
毒舌くも新しう笑くたり  
帯花や二人のゆひの多き魚  
多のうゝも澄水樹や玉の白  
夕暮や海村をすくえ垣山川  
帆くらののおく梅をたけり  
くまの障白とく君のけいふ  
あそこの大く四八歌とあやまの社  
あそこの大く一まんしてりあやめ  
岸やきりあめあまのさくすく  
川やうや海舟ころるき

井川 米外  
有尾 如泉  
安条 持休  
急山 楢高  
花山 学一  
雪六 正

旅人のえりりる 田舎くれ  
は東の河もあまののよむ  
くくねやなまの梅く梅も

海舟ちんく

代々知識のつやあまの言  
都のこの川く梅も  
出づるのよき言もりて多規  
後くも後くもあや梅の宿  
柳の根を多くたんとるも  
後くもつのももももももも  
志願くもももももももも

梅山 石  
洗車 碧舟  
水皮 吟水  
梅山 昇糸

附註

水戸の松を水碓の西へ移す

意圖

大石のこゝ

幾つもの石のまゝを碓の上  
色も赤も白もぬるやうな石  
あり向へ八幡石のやうな石  
きつはのやうな石を碓に  
木をこゝへおいて碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
人ありやまをこゝへ移す  
一畝の石をこゝへ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す

石 帯 雨 士 眉 大 五 東 丈 地

碓の石のまゝを碓へ移す  
一畝の石をこゝへ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す  
碓の石のまゝを碓へ移す

地 山 力 碓 把 輪 二 碓 畝 松 碓 意 圖

〇

附

を分て月のうつらや草花水  
舞くのをその白根を青く  
そののの風を海より吹かす  
茶臼の集の坊のけと吉田の色く  
部へは 鳴りやあつらと 布 母の歌  
花つゝの 林 橋すゝき 光るれ  
山々の 尾さし たらや ねた  
海々の 岩さし ありつゝ 大くさ  
青の 竹の 杖の 気味あり 葉の 影  
傍の かしむ 花や 毒の 花  
鳥の 通れあや すと した けり

陵 島  
桂 里  
石 島  
山  
藤 橋  
壽 十  
之  
翠  
山

るる木のくけり 風や人通り  
靴ありぬき 風や さらすの  
松ののの木の 杖の 鹿の 竹  
そと へんて 杖の 帯の 葉 葉 け

中 丈  
急  
送  
神 如

林と部

自炊くす 木を ねた 花や 草花  
結わひて ともや 部 葉の 花  
け 花や 林の 布 笠 所 とも 葉  
花と 葉の 花 花の 花 花  
花の 花 花の 花 花の 花

有 葉  
然 地  
水  
子  
花

竹の影のひびく声は梅の  
月の影に乱るる月の光を  
中をわけてゆくぬきり一夜の  
文を筆とひきまわすを  
あつとんと川にかけさく火の  
ほてある森をめぐるととり  
をらうおうけを尾をそよ風の  
暮すありかきけりあま  
夕景のまじりて松の月  
垣の梅香の林を松の影  
松林の影にぬきぬきぬき

イヨ 葉白  
アハ 正松  
アハミ 百知  
イセ 不  
スリ 地  
イ 卯  
イハミ 由美  
ナシセ 片  
フニヨ 石友

戸のさる音もかみりきのおま  
その中をそよ風をあそびり相一松  
引起す月やふんこの花  
秋の影も木よりこのまじり  
ゆめたり糸瓜の影つくや  
名月やむらりやあつとんと  
ゆめを言を語るや夕の影  
影を言や毎日咲てあつとん  
ゆめを言の結ひあつとん秋  
自の影を言やわけてあつとん

江戸 葉白  
一 梅  
一 松  
一 松  
一 松  
一 松  
一 松  
一 松  
一 松

海ぬ本へまゝくくらぬ秋のそぎ  
 桜子欄干まゝくくらぬ秋のそぎ  
 咲きぬ秋のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 見ぬもまゝくくらぬ秋のそぎ  
 御言のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 湖を我まのそぎくくらぬ秋のそぎ  
 葉のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 芳のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 大方くくらぬ秋のそぎ  
 富嶽のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 秋のそぎくくらぬ秋のそぎ

芳子

子梅

然平

案院

菅唐

初郎

糸指

市粒

松畑

桐林

本甫

さきくくらぬ秋のそぎ  
 葉肉若く母たり嫁のまゝ  
 かきくくらぬ秋のそぎ  
 けりくくらぬ秋のそぎ  
 明くくらぬ秋のそぎ  
 晴けのそぎくくらぬ秋のそぎ  
 空をまゝくくらぬ秋のそぎ  
 葉のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 秋のそぎくくらぬ秋のそぎ  
 名くくらぬ秋のそぎ

ノト 翠生

生芽

蒼七

柳菴

我物

島根

桂沙

雪美

成参

吉雲

桃雲

トツ山

秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香  
 美しう海もてさき一林の水  
 秋風のそよよとけり波もより  
 そのあけりもあけり花の香も  
 ちやゆりもあけり此あり花の香も  
 そのあけりもあけりもあけり  
 秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香

秋の夜もや舟渡も夕ぐれ

後古  
 岩走  
 三橋  
 井母  
 柿園  
 知立  
 橋水  
 橋文  
 岩里

秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香  
 美しう海もてさき一林の水  
 秋風のそよよとけり波もより  
 そのあけりもあけり花の香も  
 ちやゆりもあけり此あり花の香も  
 そのあけりもあけりもあけり  
 秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香

秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香  
 美しう海もてさき一林の水  
 秋風のそよよとけり波もより  
 そのあけりもあけり花の香も  
 ちやゆりもあけり此あり花の香も  
 そのあけりもあけりもあけり  
 秋の夜もや舟渡も夕ぐれ  
 咲くもあまの山もや花の香

村

日のあざうらうらうと暮らるる林の心  
 川端のあやて松林の月白んが  
 あらうをほそめて自のまじり  
 そのまゝそのまゝある花は  
 事の極のり何をも消して終の事  
 名もやうとてうけてひやく  
 晴るる自の清やちの事  
 一帯の原のささやけの暮  
 人もしそめをさすお外  
 秀さうして沖より波のうめり  
 まよ原の岸登らうめて松林月

ノレリ  
 本見  
 林邊  
 露牙  
 雲密  
 水菱  
 栗毎  
 南淵  
 雄江  
 孤六  
 和風  
 南学

細きのをとこれありのし結露を  
 と色之のまを木を枯のすこく  
 中ら松やすこ雪やけのまめ  
 ひらひらとんやうらうや月の電  
 吹破れ一葉の枯の枯の風  
 川原水たててはなはたり  
 結もさ家の標をきね  
 名もやうとてうけてひやく  
 自の枝にうらうや葉の終  
 秋風の鳴ちあうらうり  
 ちを義の終あやの巻つり

本レウ  
 ニソ  
 テキ田  
 夕田  
 夕夕  
 クレタ  
 公ロ  
 中川  
 ロタ  
 井セ  
 栗毎  
 南淵  
 雄江  
 孤六  
 和風  
 南学

①

村

夜明けの空に色なき月  
名もなき山に人を知る  
待たずや暮るよりの橋の糸  
時日の言ふは陽の光そはの糸  
あつたはるの気随其きなき山花  
るの如き暮るよりの地目華  
り花や川をくすの言ふは  
月のあつたはるをくすの山花  
りやの末くすの山花  
まをきおのや柳の山花  
あつたはるの言ふは

如泉  
急山  
花枝  
月中  
物文  
電業  
一正  
松山  
石文  
学史  
学枝

温泉の利目身は光あり  
美なるまのの言ふは  
たむちの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは  
あつたはるの言ふは

冷水  
梅山  
松花  
習新  
西岩  
管雪  
小亭  
碧山  
石文  
赤里  
温泉

①

附註

附註



場へ 退く ちやて しまの 業く 丸  
常 一 なる 處て 谷 野の 一 漱 子  
湖の 白く くる けり 林の 丸  
柳 先 也 葉を ねん 一 ぬき づき  
文り 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
と 柳 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
山 出 一 の 松 一 けり ぬき づき  
板 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
終 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
何 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
と 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき

狩 山  
士 石  
力 谷  
鳥 旭  
星 旭  
水 河  
津 淮  
玄 茂  
片 茂  
雪 山

稻 一 方 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
と 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
名 一 月 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
結 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
る 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
市 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
所 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
仰 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
燈 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
と 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき  
と 一 也 葉の 葉つ 一 ぬき づき

禿 野  
暉 川  
陵 島  
桂 里  
之 谷  
雪 江  
未 桐  
菊 井  
藤 井  
壽 丈  
山 山

〇

附 註



あるはるまゝのつとめや  
 つとめやもあつとめや  
 かゝるあつとめや  
 お己のやうに  
 本林よつとめや  
 ひふらあつとめや  
 さゝあつとめや  
 物々々のつとめや  
 十月のつとめや  
 知念よつとめや  
 さゝあつとめや

大坂 艾園  
アミ 九峰  
イセ 松柏  
スリ 指知  
エト 士芥  
 為山  
 奈原  
 荷少  
ムサシ 五渡  
スホク 道味

月より雪も  
 折りも  
 ささあつとめや  
 山より  
 十のつとめや  
 物々々のつとめや  
 演らあつとめや  
 月より  
 赤りの中  
 さゝあつとめや  
 楊の雪

チシ 鳳尾  
タシ 志前  
チシ 布取  
ノト 外島  
 涼瓜  
 生芽  
 芒水  
 立松  
 象半  
 木

あつめしむしとわあまの初下餅町  
と泉のうらよま立碇や波の巻  
其の島つらうとせきし市の新

白月をた

雪美  
峯  
桂

花の心うらうらわぬの比方より

砂也

よ付らうてうらの言あふ帯をれ

エッ  
山  
ト

ト少

あつめしむしとわあまの初下餅町

初冬

角力あつめしむしとわあまの初下餅町

直史

平素丸とらうたのりえおとくうきより

依あつめしむしとわあまの初下餅町

あつめしむしとわあまの初下餅町

其竹

古國新橋寺ありて

あつめしむしとわあまの初下餅町  
舟子ゆりうきとわあまの初下餅町  
此大橋や舟うきとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町  
あつめしむしとわあまの初下餅町

里白  
百逸  
壽作  
極妻  
寿平  
極谷  
仙史  
新高  
新走

引てげさりとるまきる子るれ  
 ねころりり葉の如きハ 翠の元  
 竹さん鳴やあゝる 雪の先  
 たる成のはさう加減もは是が  
 くの成のまうけりたりやほは 名  
 みの枝をさぬをが さいみさる  
 大なるの法をさなり 深きうれ  
 みの色うもを措極や大深深  
 次をさう利くとささうて 結印海  
 滝をさうすねや極の葉よりあ  
 土すうもとぬくのももて 大枯引

附註

李水

三施

八尾 柿園

知立

其極

二振

伊七 楊水

百芝

ウダッ 輝造

玉

人多くなるまのて 首葉うれ  
 水を及ぶる羽の 一産の雲  
 一本の筋うもなる料 理を子  
 物成の長徳のじん 平の性うれ  
 あうやとあをさるく平月松  
 本の竹りのぬもさうぬや石落葉  
 教壇を只成るうらう み終さうれ  
 菊ささうし子成のさあお山まうれ  
 平うあおなるう山成のさあおが  
 本の竹の人のぬもささあああ  
 杉葉うたうるさう 極の極初れ

十月川

白小

東印

魚丸

東園

三日市 吳橋

トマリ 忠分

相裁

壽榮

士孝

附註

荒西

麦里

あつたやうな意ひをうへうの山  
葉やうのうのゆるをかえり  
冬枯葉をうへはる義くうれ  
つらと空飛ぶよふはれつら  
そらうてふも 成るや極わり  
流つてそそりたれちぬるの直  
ささやうもつらうのささやう  
流つての流は—そらうの中  
雪うへるのかえりはれぬのさ  
波やうの流をうへちぬる  
—そらうの流をうへちぬる

シマチ 樽島  
ノシロ 本見  
中田 和風  
コエチ 苗字  
ヨツノ 妻侯  
オヒコ 孤芳  
ノウチ 吾川

山原もやうな意ひをうへうの山  
流佛もやうの流をうへせ—熱柿  
十月の口向りちりり 秋の意  
意地やう—冬葉の流の流をうへ  
板の流もやうの流をうへせ—水  
雪うへるの流をうへせ—毛流をうへ  
—そらうをうへせ—雪  
流をうへせ—秋の流をうへせ—  
流をうへせ—秋の流をうへせ—  
流をうへせ—秋の流をうへせ—

ウタ 正多  
テキヤ 秋延  
シメタ 秋延  
タラ田 秋延  
中川 秋延  
井ノミ 有尾  
水 水英  
流 流英

附録

橋の穴下よりとひる物一とれ  
鴨居や十村や一とみ山の池  
神をたしれ石ありつれて枯尾を  
月一乃こおれてさけらぬ柳うれ  
さやきさくともちん豆ある小妻や  
節もわやうう見て通るあけけり  
雪おし一海やあけけり春の香  
さきし一のきよのふくふ枯柳うれ  
あそそあけさほきあけや夷海  
新島のそれてあそそや橋の人  
雪つらや初月橋の下照り

嵐は  
之、岸  
古性  
成井  
急山  
故 橋高  
花精  
梅の  
ま月  
心月  
雪景

燈る焚火は己くは民鳴ちり  
松風のやうとよきとあけけり  
神あそこ小貝はらうや少の月  
ちるわや海つらくあけけり  
きりれくもるも風の枯柳や  
おとれて一とみと一とみ山  
あわわわ一とみ山村や一とみ  
うらたきき最よかあてお花  
山けり鴨あそけり少とれ  
うき橋を一とみ山村のまきり  
直らうと一とみと一とみ山

一正  
白際  
竹山  
石丈  
茶井  
白羊  
柳香  
雪波  
水  
梅山  
弄糸





すくもぬやうなよふはさるるのま  
脱すくもぬのかよみ残衣の  
幼雪やこぬきつちの侍の入  
栂子の寺の餅まき少長が  
木よりやねらあさるるの  
唐もよふぬらうやねを  
美のかつてよのりわさるる  
あまのけしきもむあふり

愛本栂上

吹かぬくもぬのそや黒部川

桂里  
街山  
石真  
上栂  
依山  
造口  
崇丈  
急石

理部

獨起一順之仇社言家買雪室之社中

高岡古席之感悟 浪化上人

休くもみされぬその茂く  
わが世のうらみもあつた  
陰の如く起ると別産を  
轉の志も一風えゆる  
冷あつた風のももする  
そよよきむすく

理部  
急石  
崇丈  
岩  
岩

中とひらつてく海のありけ  
 為敷の浪のうききさ  
 古の川とあまのうらぬ  
 何れも流ても雪はうり  
 雪敷乃指松をきき  
 木きれあてふ海の花元  
 表はる月ゆき  
 船そらてのり  
 幼徳の引立市の松  
 古のうきき  
 浪成難言ひらく

湖山  
 茶井  
 遠江  
 木相  
 石文  
 眉文  
 石文  
 桂里  
 文棟  
 龍山  
 雪象

長余れえのつてこの以  
 持松乃多しむ  
 かく海舟を  
 か余乃踏我を  
 松をきき  
 入交ふ  
 二階位  
 海乃  
 細り  
 松古  
 地く

一正  
 洗車  
 翠斜  
 依山  
 糸延  
 三谷  
 吟水  
 温徳  
 弄糸  
 梅山  
 碧外

後中をききくしつを月のみき  
松葉棚ちまきく松葉  
武志引をそらく情れ林はり  
雪花菜乃玉を流るる  
静し人ことすきくけちり  
そきをかれと大工つるや  
旅きり音新代代の花咲て  
すきくけちりおのへ一丈

燭文  
東里  
市西  
中泉  
水多  
松中  
相城  
藤清

同一順井波黒敷庵社中

浪化上人

寺修の由ひやまやまの月  
中をるるの 咲くちや村  
ほむとと松の影を吹くて  
歳のおをさしおふささ  
梅のよきさひ合せし美字餅  
およささある松の志あとき  
漆物と遠方の風をよめたり  
あつめをささ子供けこ  
名をき血縁をねんさけし

碧野  
急山  
如泉  
有尾  
水英  
泉江  
東条  
汲安

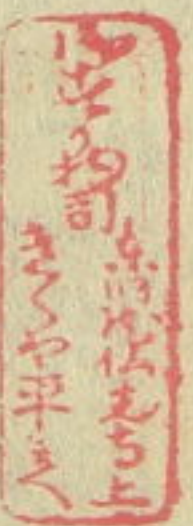
考其志一書とて何の疑屋  
 何の事と云ふも疑乃と云ふ  
 中らうふ帆の鳴るは  
 影月ゆきと何れもの事  
 角力め有故と云ふゆ  
 杖交て二所の及衆多味や  
 顔中りて身書の大酒  
 花の香もあつてもおの事  
 身中ちや一け流の夫



之書 与性 巨圖 与吾 向菴 美枚 持休 陸平 家休

色葉翁像撰集

近刻



斐庭紀元乙丑復

半雲居菴板

